



和漢文操

書表類
書法類

四



5
2236
4



門 利 9 51
2.29
卷 <



和漢文操卷之四

○美喪類

剃髮文



東菴坊

柳後園の吾仲剃髮して遠く國を去るるとも
近く申るの樂に入んともそと人向の如く
ふりててとくと界の輪廻とて人をく
きりてとく仰のまのいのみと凡そく
とらよとて顛倒とも法轉ともなりけり

144

くちらるんもは抑のちいむしおつこちらるんもせられ
一人の罪とよまされしあもる百阿くいんんたり
て此清此自在あるを好むを喜ぶ事途のゆめへの
つしよそひ着束のけしとそくしおくこを賢く
帰依しめりし一文不知のるんがうんをせ

○註曰△聖取林清規剃髮文は流轉之界中因惑愛不能斷
業因心入無為真實報恩者 △佛經善田子書
す人より受生ラ祐スル勸善ノ詞アリ △禪録之家村重光
悉如トハ片山里ノ愚妻ラ云リ △聖取林清規得度ノ下ニ
之飯戒ヲ授ニ詞ニ師云汝能持不沙弥云能持

△高砂院經三十八折言願り細奉ニ及ス △教行信證ニ遠
ノ旨ナリテ愚夫ノ沙汰アリ一向ノ大秘訣ナリ △禪語は只
眞慢人眞見人慢 ○西行寺世の中此人入るるの松糸
つらつられり乃ちをちまきれ ○持をくくめを
及くも手々のわりおれをくくめを ●白鳥文集匹如身
後有何事 應向人間圖所求 ○持弓ハ剃ノ詞寄ナリ發
心ノ事多シ ●白詩 坐歌途向孤雲上聖主來迎落日
前 △清規授戒下 誦授飯依之室 語之遍飯依飯依
法飯依僧云 △又不知之教起請ノ詞ニ四文枝タリ結語
○禪云けむら例の虚証やうし平竟と愚の了も
能得の酒屠といふしやうの虚中の空し眼といふし
それいふよりの表類入ましやうと別めたる仰る飯依

好ありしをいふもよくみありしをいふもあはれしを
 芭蕉家の捧ひし虚文の妻とらふもなほせしむ
 我家の事劇とあらば孔行し向科の十哲あるはよく
 武陵は故に光景あれは具角瓦甍と国の形あり
 ろうし洛陽より那高白あれは去来む竹と清のあり
 こころとして筑紫の浦くし陸奥の末くしともはとこ
 ろふもあはれしに我所のつるはれは武陵の事なり新茶
 しく幻に庵の山居より薪水の方と人よりあはれし芭蕉
 庵の撰集より公筆よりそのおもひよるはよくはとこ
 ころなりはれしをいふもよくみありしをいふもあはれしを

ともいふもあはれしをいふもよくみありしをいふもあはれしを
 じりもあはれしをいふもよくみありしをいふもあはれしを
 云下りつるもあはれしをいふもよくみありしをいふもあはれしを
 の本曾きに一日の事ありては善と信をいふもよくみありしを
 のりまおと信をいふもよくみありしをいふもあはれしを
 のありにぬを中国の事ありては善と信をいふもよくみありしを
 やをいふもあはれしをいふもよくみありしをいふもあはれしを
 して武陵の古より人々感得の事ありては善と信をいふもよくみありしを
 してりおの事ありては善と信をいふもよくみありしをいふもあはれしを
 割ありては善と信をいふもよくみありしをいふもあはれしを

えりて信所のふあつておぼせとちかたててはき連ぬの
凡れとあり一山の信津とは灯とつらきと葦葉指花
の信春とはくそとあつてふあふ双樹の林とたへ花系
のたふとくもくもくとまき歌のまふあふはらうのふまの
まふれはけけけとまきと遺物ふひきとつて山の信
とけふにちかたてて中一と信所の新とら中中二と
り輝の信とはくそとあつて百世と香火の因といふと
一と信所の果はまきと我所の成功あつてや信と
ふまのふはけけけとまきとつてまきとつてのいふと信
や我所の文字とまきとつて信所の遺信とつて子鹿と

つておぼせ、白馬の百十二はらひ能譜十論の筆授あり
て和漢と世比のり用とあつて、白字式と再撰して
古今に法式の所以とまきとつて二書と我つて大撰あり
とや次や唐土の助詔解とやうけ、我あふ和詞
とあまきとまきとつて源中杖衣の類とつて神書のまきと詔
のまきと信春とまきとつて直名とまきとつて真名とまきとつて
信春とまきとつて一字の不用あつてとまきとつて信春
の詩と裁とつて一國法と和訓の韻とつていふとつて、真名
の詩と制とつて和漢と平仄の比とつてたつち和おぼせ
此新詔とあつてまきとつて古今の信春とまきとつていふとつて、

作の法とてさういふべきをわきまの所執する所なり
御はといふは清はとやうけ能く世はとほくは
時人享保丙午の二月十二日筆と實前前の水
もくまてけまともうるは誠恐領有敬白

○註曰△五事因入無為上刺髮又ナリ前ナリ △碑銘
百發百中ト云ルヲ多ニ發トハ領挫ノ翻轉ナリ △論語
吾道一以貫之トアリ方貫上ノ理万通ノ敏捷ナリ △詩格春
宵一刻價千金トアリ梅ニ此詞ハ解語ハ老後ノ樂ト云ル
白馬ノ遺訓ヲ摘ナカラ老ノ月日ノ大切ヲ云リ然レハ發百中
ト龍レ一以方貫ト轉スル等ヲ摘骨ノ願神ニテ文法ハ例
言フニ及ハス百千カラテレニ設ニトスル字對ノ絶妙ヲ稱ス

キナリ ▲論語ニ四科十哲ノ各録アリ筆ニ及ハス梅スルニ
武洛角ニ枚以嵐蘭子那尙角ハ有若曾參ノ書スアリテ
辟言ハ蕉内ノ補依ト云ク其角嵐雪去来ト云ハ子游
子夏カ入アリテ辟言ハ蕉内ノ史令ト云レハ論語頌
田無代善無施受ト云ク新水ノ帝トハ朝暮者ノ變歎ラ云レ
ハ論語吾々面言終日不違△此科ハ德行ト言語ト文字
トナリ政事ハ今ノ用ニ亦ス梅ニ此詞ハ我師ノ德行以下ニ科
ヲ奉キ表文ノ有増ナリ是ヲ本注ニ文法ト知レ ▲假名ノ録ハ
七字ノ謎ナリ漢ニ曹娥ノ碑ニ效リ假名ノ碑又ハ此銘ヲ以
本朝ノ始ト云キナリ ▲伊羅双樹ハ天皇ノ系木ナリ今ノ双林寺ニ
在ナリ ●聖歌ノ雲ハ前ニ出ナリ ▲歌波邊杖ハ角屋ニ
出山佛ノ古ナリ十論ノ爲辨見レ△佛書ニ結ヲ白火因ハ

燈香燃灯ノ因縁トシテ△老子經ニ至而正持功成不居△祖翁
 遺稿トハ雜波遺快ニ父奉ニ及故ハ杖以ニありニ考ニする
 照權トアリ自字式ハ五秘ノオトツ△自集集ハ俳諧遺訓
 ナリ四十二條ノ家法アリ滅後ニ其集ヲ傳フニテ由馬經トハ
 内人ノ稱名トツ△自字式ハ俳諧式目ナリ用權ニ古今ノ違
 リトツ△大和詞ニ冊アリテ先師ノ新撰ナリ漢書ノ物字ニ和訓
 フ如テ大和直名ノ用トス五多ノ古法ヲ以テ款アリトツ△辭類
 引類ハ本朝文鑑ニ細註アリ其題下ニ見ルニ△款快ニ我身
 ノ多孫云ヲ教ヘ奉テ官禄ヲ整ム時ノ詔快ナリ歎ハ吾官功
 ナレト撥又ハ大和ノ故文トフ△東卷式ハ自字式ノ附録ニシテ
 多ハ月花ノ詠ナリ△一字録ハ先師ノ家訓ニシテ時且ノ一字ヲ以
 テ世法ノ用トセリ△云條法ハ十論ナリ△五條式ハ文賦ニナリ共ニ

其書ニ見ナリ △授記ノ三字ハ佛經ノ語ナリ按テ一切經ハ
 多ハ燃灯佛ノ授記ニシテ例ニ述而不作ト云ニ聖經ノ辭多
 ナレハ多ニモ祖翁ノ授記ト云ナリ △史記潛統皆贊ニ談言
 微中トハ俳諧ハ微細ニ物情ヲ尽テ言語ノ的中ト云ナリ按
 スニ此段ハ二條法ノ結トナラウ老若ノ一對ハ字對トナリ意對
 ナリ又ニ筆法ノ絶妙ト稱スニ△論語君子有ニ之喪整
 之儼然ニ而之也温聽ニ其言也厲 △我頁ハ公事我ト
 子頁トナリ禪語坐斷天下舌頭下ハ人ニ口ヲ明セ又事ナリ
 △史記孔子誡子貢曰美言信慎言哉按テ公事我
 子頁ハ言語ノ科ニ答ナラ折々ニ言語ヲ誡玉ナリ其等ノ
 懲懲ヲ勸破シテ釘語ハ頓坐ノ絶妙ト稱スニ △誡語字
 トハ中古ノ凡ヲ云ナリ言偏ト人偏ノ論ハ十論ノ才一段ニ見ルニ

△史記論曰其常以詠笑記諫記諫稱美孔子家語
ニ出たり△惡懲罪善勸功ハ勸善懲惡ノ常語ナリ
多ク文章ノ裁新ト云テ格ニ倒持ノ絶妙ト稱スレ

○評云いささか自家の風範として論を師法と感する
し似せんと始段より産神の風範をまかりて風範を
生知のああるものとありし中段より我師のこれと
あけり他道建立の體文とありし結段より産神の
親愛しあやして百世の法と稱せしやうをきくん
早業と歎かぬ在例よりありし文句の起語と見
て愛し言治の履實とまろく喜ばれし一悲慕の
あやりらるるものとまろく減ららるる減らるる
むへこころとまろく此表の評詞らるる

○教令之類

庐山公九錫俳諧文 宋袁淑

若乃之軍陸邁糧運艱難謀臣傳美武夫
吟嘆爾乃長鳴上黨慨慷應邦崎嶇千里
荷囊致餐食用捷大勳歷山不利斯實爾之
功也走隨時興晨夜不點仰契玄象俯協
編刻應更長鳴豪分不減雖契在若若未
足比德斯又爾之智也青背絳身長頸廣
額修尾後出巨耳雙磔斯又爾之形也嘉

史既孰實須精麵負磨迴衡迅若轉電惠
我衆庶神祇獲厚斯又雨之能也是用遣
中大夫向丘騾如甬使銜勒大鴻臚班脚
大將軍宮亭侯以湯列之序江江列之序
陸吳國之桐庐合浦之朱序封甬為序山
公

○評云此文と宋の事文取取しゆく様即のハ字も
とくなくしは西名を以て其の他諸の道よりハ史記滑稽傳
に入るとあけつれりゆの六藝といきこあつて傲中ハハ
解紛とつたを史云々賛詞より優旃ハ談笑ハ

語のあつといとらへ優孟ハ諷諫ハ御儀の用を
しと知察ハ諷林ハ滑稽傳猶俳諧と之れを
俳諧と俳諧との後国の字論をゆゑれしハ俳諧
の文とあつとい馬ハ官禄とあつて和使とあつり
供奉の行侍とあつてくらふといを言詔の遊よりハ
漢ととい文とあつてやいむとあつて笑ハの令城ハ
たふとい曲とあつて俳とあつてまふとい文とあつて
我文採の選場とあつてれとつてハ史記の秘蔵の秘
蒼駘馬の九錫とあつてとい和漢の文對とあつて
古今に俳諧の名とあつてといのとい文とあつて虚之文
の鑑とあつて返書とあつてといのたのといハハ
事文取取ハ林羅山の臨とあつてといのたのといハハ

おあゝぬらねはも葉書うけは凡はらで扇と鏡
とのたしとまねあしとる家武家れ笑例いよりて
田舎くうも番ありも大工た宿の家くかき方民ん
と貴族て今うと祝言の才一と親とけよに何は
あゆううて皆まきけの素あもやらうとて和漢の
は身とたあられかく文章に各と傳ふちりあし一書に
之越の各よるまき金城の松を其臺に一株九曲の松あり
そは枝を流のまよ様くうけ枝を虎の爪を流の
一園中双の本ちらうとて享保のころその明の月
天皇の命ありて蒼蒼鬚公の各とあむり九品の

宿禰と揚子松を非松の地ふくおしよの各よま又揚の
信あれあまや君臣のれあうんまとくんとあう仲れ
いさうかう近くと今あせの松もきうらにやうて
世家のいよとゆとよ松もはくまもまきりて九銘の思
と忘れされと色こたにおり椰子ののうと舟各連
うけのうらう馬と松との他認し和漢のあつらひあり
と他陽文し和うてかまむ者則天様かくれとて
九陽の次才あやうとて車馬二うと衣服おし舟於
のほれこまを馬と車に谷のうとひりて鐘山の鶴は
然心もあつとまうとる松の鬚とくまらうてみね

のまらりと清い色にやせぬ。あまのついでに。あまの
えいせいといふもふれに。虎賁とけの用にあま
ひらるに。備とてそと。得[△]小[△]帝とけのふと。あま
の能りあれに。月とをよ掃地とて。あまの。あまの。あまの。あまの。
まらむ。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。
ねと。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。
とよと。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。
あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。
あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。
あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。
あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。

のまらりと清い色にやせぬ。あまのついでに。あまの
えいせいといふもふれに。虎賁とけの用にあま
ひらるに。備とてそと。得[△]小[△]帝とけのふと。あま
の能りあれに。月とをよ掃地とて。あまの。あまの。あまの。あまの。
まらむ。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。
ねと。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。
とよと。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。
あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。
あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。
あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。
あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。

注の文を此山觀し平しく注の鬚の文をこゝに引くべし
 のもゆゑなりし行は世間の名とけり梅も天孫の
 位とたらしめてはそよの御ありしおとと御の位
 けりしと松の孝帝の御ありし御ありし御ありし
 の滑石の御ありし馬も無相の御ありし御ありし
 の御ありし御ありし御ありし御ありし御ありし
 と此通用とありし御ありし御ありし御ありし
 此の御ありし御ありし御ありし御ありし御ありし
 の御ありし御ありし御ありし御ありし御ありし
 御ありし御ありし御ありし御ありし御ありし

かん蒼の鬚とさきとありし御ありし御ありし

御ありし御ありし

○註曰△文選冊類ニ魏公九錫文アリ潘元茂ト作ナリ其註
 諸侯有徳天子錫之一錫車馬云九錫名ハ今ノ文ニ
 アリ冊ハ年ニ諸侯符也トアハ帝詔王令ノ類ト知キナリ
 ▲淮南子ニ蒼頡始視鳥跡之文造書契云昔黄帝時
 ナリトシ▲吳志ト固夢松謂人曰松十八公也後十八歳吾
 其互公ニ按スルニ此ノ子ハ錫文ノ用ナリ故ニ別直ラ合セ
 テ黄帝ノ年ト成セルヲ多シ俳諧文ト云テ寓言ノ絶妙
 ト稱スキナリ又高砂記中ニ松ト云キナリト云ク
 ナハ公ノ子ニあり梅スルニ一葉ハ松ノ祝言ヲ趣向
 ト成セル其詠ノ詞ヲ撰テ約テ十品ノ裁入アリ遂ニ三卷

ニ及父藤ノ相致ノ下ニ知シ ▲史記ニ奉命始皇ノ持城アリニテ
 雨ヲ松陰ニ避テ丈夫官ヲ賜フ者アリ○古今言集出ルル
 分ルルトセヨルハ下ノ下ありありと云々
 ▲茂れく州ニ衛士又五節カク覺ノ夏アリ 追揮ノ下ニ見合
 スレト接スニ一説ハ一節命ノ各文ニシテ松ニ官爵ノ用
 ナカラズト日本トノ智恵ヲ競ヘタル錫文ニ和漢ノ語
 テ一ナリ一言ニ俳諧ヲ失ハス等ヲ虚妄ノ虚妄ト云テ
 文ニハ身草ノ絶句ト称スレト古今序ニ松ノ葉のあり
 先トモテト云々ハあつたゆへにけりてとあり接スニ俳諧
 トハ思ヒ懸又仕合ラズテ 傲松葉ノ諧語ニヤ然レニ一説ノ
 万歳樂ハ跡形モナキ寓語トト松太夫トモ鶴太夫トモ太夫ノ
 ニ字ノ數キト知シ ○忠臣孝子ノ子ハもろゆゆト云ハ松

のありりさふげのきよりいぬいもー 松太夫知と稱
 人の心と云ふことしていへて松枝と云はてとあり○俳諧歌
 教ふてぬてぬてぬてぬてぬてぬてぬてぬてぬてぬてぬ
 ともー○意領系我あるとねとけぬのゆき○てとる者
 ともいぬとてあり ▲松太夫其至ハ賀ノ金城ニ在リ
 此曲亭ノ別號ナリ支那僧高泉ノ筆ニシテ頌歌ハ松太
 夫トアリトシ ●事又類聚松詩以韻暇々遠更清
 蒼石巖瘦甲逢耳亭々○詞花佳者云々代めいさー
 かりんさささりーや 邦も松もむけをぬ松陰れく州ニ
 此の子むさうと云々とありと子と孫ありと云 ▲者別トハ
 大和返辭ナリ然ル古訓訓等トト有下云々トト訓スレ
 へハテノ辭韻ニテ左様ナリ在則下語ヲ駐テ次ヲ替旨敬リ

ト大和詞ノ後部ニ註セリ
 即毫臣ト孔明ナリ 四書考
 徐庶曰孔明即毫也完全ニ往乃見云云車馬ハ之請身
 敬ナリ△鍾山鶴ト周顒ト偽隱ヲ云一北山移文ニ張
 空云云夜鶴然云云或ハ載來轅杜ニ喜康トアリ控スニ此
 章ニ毫ト云テ鶴ト云テ總テ松ノ縁語ヲ故古ヲ攝ス古語
 ヲ採ル時ハ此等ノ歳入ヲ鑑トスシ●松ノ蒼鬚ハ削ノ官名
 ナカラ風梳新柳髪ト云テ都良香ノ詩勢カラ令ルニヤ
 蒼蒼ト緑ト互照ヲ見ルニ○時雨ノ松ノ前ニ出タリ○通照
 歌ニ世といふ古ノなときしんかまともとらちりい
 ぬぐり霧む控スニ此ニ錫ハ孔明ト周顒ト二漢家ニ恩顧ノ
 故古ヲ攝ス慈鎮ト血照ト二後朝ニ艶色ノ古歌ヲ採リ
 テ古ヲ和漢ノ文對ヲ將ネテ詞ノ裁断ハ削ノ言ハス此

錯綜ノ絶妙ト稱スシ ○弁院等ニおのろく山守の松
 風かよふりつれぬとくろくをそとれん●史記本紀
 舞彈五絃琴ヲ歌ト南風薫兮解五音之愠云云
 此一章ハ松ニ樂器ノ自在ト松離ノ寄ハ更ニ詩歌ノ
 和漢ヲ對ス此等ヲ離々ノ絶妙ト稱スシ ●八仙詩 弟之
 漢酒美少年皎如玉樹暄風前云云控スニ此一章ハ植木屋
 ノ松ノ起語ニシテ粉黛ノ姿ヲ作セトナリ △文選曰九錫
 拒毫一曰珪瓊副正云云控スニ此一章ハ八錫ニ俳諧ヲ
 書尽シテ今更ニ拒毫一曰トハ音訓トモニ讀ミ難キヲ強
 博學ノ媚ヲ飾ラヌ日本ノ俳諧師ハ讀メヌトテ副正ノ二
 字ヲ漢文ニ假テ九錫ノ面ヲ合セタル矣ハ吳中ニカラステ
 文ニ隱見ノ絶妙ト稱スシ○宗子牙帝般らら松の

一指者也

壽永二年二月日

○評云は制札と世くもなほして或は源よりある様
 ありて兵庫各所記しとて一と記すに南不可也
 とありて石舟の字義通しとて或は弘安に節と
 別置し別當原利友殿へ花制札し後中并文
 節しと札に江南梅花折一枝者可慮哉科
 者也とお認ふに美作の流ありて花と折花心ありて
 不折ありり隆き文とて一とありり江南梅花
 折一枝可也 一指者也云々今之に九世の折れ別置

の制札と次なるは御侍や梅江南の便ありつた
 後勤ありとて毛或は天赤紅葉之例も代りけ制
 の例はありや尚又後部ありとて毛少くは令の科も
 所と并ぎと例の武貴より一蔵科の子のまの
 ちりと一枝と一枝のあやと信れ成し花の制札のし
 文事の優格とて美作と文武の名あることとる

極樂寺教

並發命

是御房

知りしれし是御房のけつりぬせしとて南并原
 の中に極末とつよありて意におよの葉花とて
 純子のひら月かきとて京浄徳の風味とて山雲

父母といふぬるのそまをまつたふと極楽の借
をなうてさる灯籠のむとちうと一ふり
とす所の極楽と名はけし新地はふの
と所はては勤のし命とちうと月次の
とふと一と所極楽のむとちうと一と
各別とさしはまの所おとさるる

四季花鳥

梅

梅のむらさきやちう此燈籠

そ所言

算

貫仙

そのやま衣しとちう極楽寺

梯

依巴

七宝の持命とちう此燈籠

すま

石明

森師も起くすまやちう此燈籠

橘

盤泉

まら花の持命とちう起御

編福

許丹

かきほらやむとあたる燈天井

桂花

石人

あけくちやきとたけのた

厚

胡伴

降さうてのきとやま

菓

里風

湖のそとよきやまの極き

斤籍

ま

みとさみとさうそ

雪花

高角

後くは陀のち柄やまめ

天人

陸夜

極中と羽帯

○厚云世教を全く誣濫してふるは解とらうな
りてはさうちを心事の厚く七縦八横の曲の部
と云くさうり句作のまじりと結と一まじり足併房
いそ神の陰号よりてあうとて僧家の善法を所

○書状類

年始状

左衛門尉

春の始、山收、向、申、方、先、祝、申、作、平、富、を、了、福、行、心

幸甚く挿、歳初朝好衣の朝日え之、之次可急
 申之處、神駟俣人の子日、遊之向、之思也、引
 仙、台、学、忘、檐、花、苑、小、蝶、遊、日、影、頭、背、中、之
 候、平、将、又、揚、了、花、小、了、勝、負、呈、懸、山、串、今、州、庫
 知、物、遊、之、九、手、夾、八、的、美、曲、節、近、日、打、張、
 孫、家、之、尋、常、射、手、弦、挽、速、者、少、し、有、法、誘、実、
 思、食、之、給、者、奉、之、也、心、了、所、由、多、新、為、期、各、會
 之、次、亦、不、能、所、多、毫、也、恐、之、謹、言、

○浮云は世に庭訓、從來、之、也、し、世、を、之、に、あ、れ、る、所、を、か、と
 大和、之、真、名、各、文、と、し、あ、時、を、あ、れ、此、先、蹤、と、り、り、(ま、い、り、)

或は惟平、之、り、も、と、和、訓、の、厚、薄、と、し、或、は、思、
 之、り、と、し、と、漢、文、の、假、書、と、し、心、を、あ、れ、り、と、庭、訓、
 之、漢、文、の、財、詠、と、あ、つ、ら、れ、い、ま、ま、と、例、の、大、和、詞、
 と、り、り、和、漢、の、兩、用、と、通、を、む、こ、り、り、あ、れ、り、と、
 の、中、懐、ち、り、と、や、む、り、り、り、り、の、優、格、と、海、客、と、
 唐、文、の、體、と、り、り、漢、文、と、ち、和、の、體、と、り、り、和、詠、と、
 之、今、は、と、此、通、用、の、真、書、の、設、り、ま、り、と、也、

遣注五郎書

楠正成

此後、自、人、名、下、了、可、非、不、至、我、亦、家、朝、近、し、
 願、費、願、成、也、く、若、き、り、以、何、處、也、わ、る、我、く、

宗醜とわらあけを
ひよとてとせしむるは
宗醜とわらあけを

乙月十九日

口

保久は遠くはたしむるは
あやふくありはれ守り
おれ國の配されぬ
宗醜の二子と配され
まじりて

遺書

熊谷入道

一 先祖相傳所領安堵御判七并保久之
以来至建久年中軍忠御感状九一
通有之事

一 對主君不可成運候并武道
可守之事

一 上人御自筆御理書并迎接曼陀羅
可成信心事

右之箇條至子孫能く可令存知
旨其外依其身是可覚悟者也
仍置状如件

申石谷十歳状

板倉内膳正

去年之元日、名能、江城、孫、鳥、慣、子、之、孫、
今年今見、有、於、竹、葉、之、城、續、甲、之、孫、候、
一、首、有、氣、候、得、共、急、戦、死、申、候、何、事、
行、世、明、今、更、候、可、祝、

西月朔日

○伊、公、は、依、之、申、之、各、あり、く、東、書、西、史、く、忠、信、く、これ、
文、の、長、短、も、中、ら、し、く、或、く、一、首、有、氣、の、事、と、
こ、ふ、ま、く、そ、事、ノ、歌、と、載、せ、り、し、河、の、さ、れ、く、也、

身、と、よ、を、控、て、戦、死、し、文、と、を、ま、ん、ん、忠、信、の、風、統、
し、忠、美、と、せ、く、下、中、と、は、文、武、の、大、将、と、稱、せ、
毛、軍、と、言、見、永、十、又、年、り、く、毛、月、と、鹿、頭、の、曾、
と、て、あ、く、毛、月、の、指、指、と、は、さ、ら、く、毛、板、倉、の、孫、
て、内、膳、正、ノ、任、も、れ、各、く、重、昌、と、り、り、也、

招隠文

東巻坊

む、周、顯、と、鐘、山、く、か、ら、れ、く、名、利、ノ、非、の、あ、く、
と、か、ら、れ、く、あ、く、の、白、駒、子、と、洛、陽、ノ、あ、く、い、く、非、と、
ま、ら、り、仰、せ、も、あ、く、い、風、野、ノ、あ、く、い、つ、と、あ、く、

○註曰招隱之字諸書不出詩凡云又氏云り隠倫今
 招請して我々下成スノ謂ナリ ▲周顥カ傳隱ノ夏ハ北山
 後文アリ前ニ出タリ梅文ルハ一篇ハ總テ移文ヲ翻轉
 セリ具文ナク見スレ△夜鶴トモ曉猿トモ例ニ移文
 裁入ナリ ●文明病中遺妓詩黃金用尺歌歌舞
 留余他人泉少年 ●未懷悼亡妓詩昨日施僧裙
 帶上斷腸痛繫慧慧結梅文ルハ一對ハ白鴉子カ在
 年ノ比ニ半懷ト如遊女ヲ失テ浮世ノ浮世ヲ見果シヨリ
 今ノ隱者ト成レニヤニ詩ノ取合ヲ存スナリ ○兼好寺
 あらとく人々もわらわらめをよこしにらうとて
 の月 ▲雪ニ曉舟トハ載運カ故去ナリ前ニヨリ○後成
 じうらふまのいぢりのあゐるふさくあまのしん

わらとく ▲浦嶋カ七母ニ逢エト夏ハ万葉長歌ニテ
 ニ載ル ▲漢書李廣傳桃李不言下自成蹊○兼好
 寺こころの浮世をわらわらめをよこしにらうとて
 ちうれ東魯モ南郭モ移文ナリ其下ニ互見スレ
 △六玉川ハ六所ノ各跡ナリ歌ハ奉ル及ハ捧スルハ益琴和歌
 ハ當時ノ各道ヲ撰ヒ俳諧ハ夷洛ノ文人ヲ蒙テ二幅一對ノ
 美色物ト成セリ誠ニ家珍ト云キナリ ▲神仙傳有老翁
 童孺懸一壺於肆頭及市罷跳入壺中云壺公弗以長
 房カ師ナリトシ ▲伊弉諾傳支道買山歌隱僧曰歌集下
 給豈聞業由買山而隱 ▲白鷗堂記ハ文鑑ニ出テ壺ハ
 絳帳ノ富言テ又ハ長明カ方丈記據リトシ源中頃ハ
 けりしんきらうのちてあり△瑠璃思ハ業師経ニ云

東方ノ淨瑠璃世界ナリノ梅ニ白鶴ノ段ハ五湖ニ江ノ廣ニ莫
 ナル清風明月ノ皎潔ナル花ノ字ニ絳帳面影ヲ字ニ瑠璃
 ニ字ニ絳帳ノ玲瓏ヲ舎スル摘語採文ノ自在ヨリ此筆ヲ
 謎文ノ絶妙ト稱スニ ○行東ノ奇ニまことこれいあつての
 字ニあつての字ニあつての字ニあつての字ニあつての字
 因幡業師ハ今ノ函居ヲ移セルニ筆師ハ瑠璃界ノ起結十中
 梅葉ノ厚ト因幡ノ松トニ首ノ古歌ヲ摘入スル起結新結ハ
 例ノ言又法ニ領詞ノ絶妙ト稱スニ ▲万姓統譜趙清猷公
 初任成都携一琴一鶴以行云雲越ニ道員ノ十キ喻ナリ
 △登客ノ雲モに敵ノ嵐モ絶テ移文ノ取意ニ筆師力ノ奇特
 シ云リ ●杜律胡馬詩風入四蹄輕 ▲增賀ノ前座空盤
 ノ詠諧アリ本朝高僧傳ニ未ダシ △隱士傳ニ竹林ノ七賢

アリ細筆ニ及ス梅ニ此ニ句ハ數下ト云ハ多都ニ似テ氣十キ
 取ト下竹林ノ風流ヲ添テ然モ賢人ノ跡ヲ追ハ下ノ例ニ其
 跡ヲ仰トセト云ハ此又ノ意地ニテ行ト數トノ領詞ノ言ハス
 筆力ニ換骨ノ絶妙ト稱スニ ○兼好寺世の中と云ハ
 〇兼好寺世の中と云ハ〇兼好寺世の中と云ハ
 將謂箇南字少年 ●山谷集江南野水碧於天中在白
 鶴用似我云
 ○ほ云此筆梅と始より北山移文ノ敵一市中に大徳の文
 採ト下一と云ハ此筆梅の詞ニ元ノ箇の好更在法と
 ろらゆれ一と云ハ此筆梅の詞ニ元ノ箇の好更在法と
 ちこそ一的一中の用と稱スル也と云ハ此筆梅の詞ニ元ノ箇の好更在法と
 ありてこれと云ハ此筆梅の詞ニ元ノ箇の好更在法と

答五老并狀

蓮二房

久敷打絶佛病氣可心之存作不從播屋法狀
 到未撰集之佛不審共逐一念之亦知作此
 者重鈴八菊杯後之好費意惟由病中之
 佛器号尚心不撻由健之段悅入後未集
 出板之後送者奉祈佛存命作然則以度達
 外申惟謂選文選之意趣乃者就風俗文選
 之中而再選申度事四五也事才一者我家之
 文章急可有虛實之認事才二者假名之

叶韻卿可有立橫之違事才之者和訓之文法
 在可有誥路之拍子事其次者有假名真名
 之配事其次者有標題之取捨事右之五條
 者於五老并書老與先師相談之時皆之被
 成合點隱出板之節文章手弱所聞之則不愜
 武士之撰錄述如本佛直作而先所在京之比
 也則校合麼隱可申肯從并筒屋內意心有之
 與哉在有事者不抱世間之諍刺不取墨人
 於相手與者適乍五老之家凡此美者遺舊行
 之法式則其耶如佛諸涅槃經此耶如南無

佛語雖似一卷之數，而教乎在許拉和漢之
學者，而唯可惡者言語之虛實也。學譬則如
父選之，直有傳，坐斷天下之舌頭，其自慢者
家以之建立，而教迦副有唯我，拙為之，讚別
教不成，華好法師，摩有七只之自讚，其曾
以人不憎，有者虛實無虛實之跡，故也。然其
傳亦為華，四季之發句，而所刺給自慢之釘，假令
其句放光明，其人情之妬者，其實也。其在那丹霞
燒給不佛，摩對有當，後至之身，而仰之一字，為
認其真，摩佛語之二字，及認其真，摩何故為

可公其罪，第矣佛語者好，不忘談法之用，言語
散者可越，松坂與所右之條，久者先師之遺，年而
答佛中面大肯也，將又我黨之所，冀有為者，老
之文章，二之篇，而所度成文章，之錦，則文選之各
為成，紙上之戲論，而文章之文情，亦可傳，而世
厚哉，而實不惑，凡雲之沙汰，多係給謝，公
之筆力，則選場之大幸，何事知之矣，其故封，其
快而祖，公羽之得，前林，其香而董，誦再之，而申，遣
候貴報者，例之奉，待抑後園，惟

多罪之誠恐頓首

傳ふは伏々傳ふのほねあつて如く屋土の助をやらせ
 て例し和漢の通用とあるのやこゝに魚錦といひ
 翰墨令書といひてこれの當用といふにんまゝに
 我々のまゝを連て論語といふも庭訓といふも
 書通といふもの日用とまひはらんやたゞは伏の
 こゝに寶永の中比まん選文選のせりよはは
 先作と許六と贈答の論あつていふを御を
 うゝといふて寶永の幸卯と世とらりのくを
 こゝに遺命といふといふ書と又を井と再作
 する文鑑の一冊きつんとよとよはるゝに伏の
 秋よりいふまゝに又を主人とせよの幸卯の秋と世
 と許といふやこゝに此を鈔を湖南よりりて又を世

病床よりあひいふて一落掃舎と五を井と此筆
 及まゝに伏諸は来のこゝに今の伏書のある
 といふのすにこれのや許と文鑑のあつていふ
 こゝに人の命終あらんまゝに我師といふに
 一木杜のあつていふと許して重論といふ
 十歳一遇の知己あつていふ我師のまゝといふ
 横説は伏といふといふといふたれといふ
 けは伏のほちるや

け一伴といふ松子庵の初書
 百字二巻の幸卯の書
 伏の書

1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100.

文攝卷之四終

